



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

いま「戦場の記憶」を問うこと：「記憶」が「歴史化」する時代における「歴史実践」にむけて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属国際中等教育学校 公開日: 2025-05-08 キーワード (Ja): ETYP:教育実践, STYP: 中等教育学校, 日本史 キーワード (En): 作成者: 久保田, 真人 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学附属中等教育学校
URL	https://doi.org/10.50889/0002000987

いま「戦場の記憶」を問うこと

－「記憶」が「歴史化」する時代における「歴史実践」にむけて－

Questioning "Battlefield Memories" Now

－Toward "Doing History" in an Era in which Memory Becomes History－

地歴公民科 久保田 真人

1章 はじめに

些細な思い出を振り返るところから始めたい。私にとって「戦争の歴史」に思いを馳せる時、その原風景にあるのは祖父母の有した記憶の語りである。

母方の祖母¹は 1927 年（昭和 2 年）に秋田県の大地主の長女として生まれた。教科書に出てくるような寄生地主の家系である。実家は立派な屋敷で「お嬢」と呼ばれていたという。しかし、敗戦と敗戦後の農地改革に祖母の父は素直に従ったようだ。不在地主として多くの土地を手放したことで並みの百姓になった。祖母には兄弟が多く、幼かった祖母の弟は敗戦後の学校で「もと地主の子ども」という理由で壮絶ないじめにあったという。また、経済的にも困窮した。敗戦後祖母は実家に戻ることが許されず、親戚の縁で静岡に移住することになり、そこで祖父と出会う。このように戦争が祖母の人生を大きく転換させた。

祖父²は 1926 年（大正 15 年）東京の上野に生まれた。祖父は若年より弱視で病弱だった。戦争末期の徴兵検査に「合格」することも招集もされることなく敗戦を迎えた。そして敗戦後の困窮の中、幼い妹と両親を抱え焼け野原の東京を去り、静岡への移住を決意した。祖父のことは祖母がよく話してくれた。自分が病弱で徴兵されなかったことに負い目を感じていたこと。憲兵に監視されていたことで、終生警察嫌いだったこと。戦後に教師という職を祖父が選んだのは、戦時期に青年期を過ごした社会や国家への反発があったのかもしれない。

幼少期より以上のような経験の語りを幾度と聞いてきた。大学と大学院で日本近現代史研究の真似事を重ねていく中でも、私にとっての戦争の記憶の原風景はここにある。そして、この原風景は、学校教育で培われた歴史像に対する違和感として存在し続けることになった。つまり、農地改革により寄生地主制が解体され農村の格差は縮小したのではないか。根こそぎ徴兵され多くの兵士が戦地で亡くなった以上、青年が招集されずに生き残ることは恵まれていることではないか。このような疑問が私自身の歴史に向き合う姿勢を構築してきたといっても過言ではない。原風景にある祖父母の戦争の記憶が以後の私自身の認識を攪乱し続けているのである。

ここで問題にしたいのは、様々な人間の戦争体験に触れることが大切であるとか、様々な戦争の記憶を継承していこうなどといった目的意識だけではない。「無数のひとりが生きた歴史を紐解き、無数のひとりが日常的に紡いだ歴史に寄り添うこと」であり³、それを「学校で学ぶ戦争の歴史」という大きな語りの中でどのように意味づけられるのか、という問いである。そして、「いま」を生きる私たちが、これまで有してきた「歴史に対する見方」に対して、過去の記憶の語りに触れることで生じる動揺や攪乱を可能な限り言語化することである。

2章 「歴史実践」と史資料の意義

1節 「歴史実践」について

近年、「歴史実践」という言葉が歴史教育の場において重要な意味を持つようになった。文化人類学者の保莉実が方法的提示した「歴史実践」は、歴史を過去としてただ学ぶだけでなく、過去との「対話」を「日常的実践」において重ねていく営みであり⁴、過去の問題と現代の問題をつなげ、自分自身の生き方・あり方につなげていくものである。そうした試みを歴史の授業実践として具体化した小川幸司の一連の仕事がある。小川は、遅塚忠躬が『史学概論』で示した「学問としての歴史学」を再構築し、歴史家の行う「歴史実践」として以下のように整理した⁵。

A【歴史実証】	問題設計にもとづき、諸種の史料の記述を検討（史料批判・照合・解釈）することにより、「事実の探究」（確認・復元・推測）を行う。
B【歴史解釈】	事実間の原因と結果のありよう（因果関係）やつながり（連関性・構造的性）、そして比較したときに浮かび上がるありよう（類似性・相違性）について、問題設計に関わる仮説を構築することにより、「連関・構造の探究」を行う。
C【歴史批評】	その歴史解釈にもとづき、より長い時間軸やより広い空間軸においてみたときの意義や、現代の世界に対する意義について、「意味の探究」を行う。
D【歴史叙述】	歴史解釈や歴史批評を論理的・効果的に表現する「叙述の探究」を行う。
E【歴史対話】	以上の営みについて事実立脚性と論理整合性にもとづいて検証を重ね、特に歴史実証の矛盾や歴史解釈の矛盾のうえに歴史批評や歴史叙述が行われていないか、歴史批評や歴史叙述のありかたが歴史実証・歴史解釈を歪めていないかなどを、他者との協働によって考察することにより、「検証の探究」を行う。
F【歴史創造】	歴史を参照しながら、自分の生きている位置を見定め、自分の進むべき道を選択し、自らが歴史主体として生きることにより、「行為の探究」を行う。

以上のプロセスを経る中で、小川はその「歴史実践」が「それぞれの人生経験に深く根差している」ことを重視する。そして、そうした「固有の価値」を互いに尊重しつつ、自身の持つ歴史観＝歴史叙述を「相対化させ続ける意志」を持ち続けることに意味を見出す⁶。それは主体が「歴史家」であるか否かという問題ではなく、誰しもが、歴史を探究するというプロセスを経ていくときに「歴史実践」はなされていることを意味する。いずれにせよ、ここでは生徒が歴史を受動するだけの立場ではなく、自らが意味付けを図ろうとしていることが重要になる。

また、「歴史実践」が「日常的実践において歴史とのかかわりをもつ諸行為⁷」であるならば、学校現場に限らない多様な歴史実践の営みも非常に示唆的である⁸。戦争の歴史における「記憶の時代」において、「いま」を生きる主体が歴史に働きかける試みは、博物館、遺跡といった具体的な場所の探究から、絵画やアートなどの手法に至るまで多彩化している。

それでは、どうしたら戦争の歴史への「歴史実践」の入り口に立つことができるだろうか。「歴史実践」が「日常的実践」においてこそ意味があるとするならば、まずは「歴史実践」の前提となる「過去」との出会い方の方法を模索していく必要があるのだろう。すなわち上の小川の整理におけるA【歴史実証】とB【歴史解釈】である。しかし、小川が例示するように、歴史授業の実践におけるA【歴史実証】における「史料」とは「信用できる史料」であり、「事実立脚性」と「論理整合性」が第一とされる。

むしろ、ここで問題となるのは、戦争を語る上での「信用できる史料」とは何かという、「史料」の言語的構築性であり、「確かな記録」と意味づけられてきた政治性である。つまり、その「確かな記録」から埋もれ出た個人の肉声こそが、構築された歴史像を動揺させる装置となるのではないかという仮説を探究することである。そして、その個人の肉声に迫る意識こそが、形式化された歴史像を相対化し、個人の人生に根差す「歴史認識」を生み出すものではないだろうか。つまり、日常生活を送る中で、日々歴史を刻んでいる主体であるという意識（F【歴史創造】に類似する）として、A【歴史実証】における「問題設計」の前提となる意識である。そこに自覚的になるためにも、「過去」と「いま」を安直に断絶させるわけでもなく、自己が生きる「いま」とは異なる世界である「過去」に触れる「入り口」が重要になるだろう。

そして、「いま」を問うことにも意味がある。成田龍一が整理しているように、現在は、直接的な戦争体験を有する「体験の時代」を生きた人々が次々と鬼籍に入り、彼らの「記憶」が様々な手記を通じて語られ、記憶の共有がなされる「記憶の時代」が「歴史化」されていく過渡期にある⁹。そうした時代を生きる「私たち」が戦争の記憶を意味づけることで、戦争の記憶の「歴史化」が達成されるのだろう。それは、「改めて個人を（国籍、民族、家族など）さまざまな境界を超えた存在とし」て捉えなおし¹⁰、「一人ひとりの固有性に立脚し、記述することの意味を問い」続けていくことである¹¹。言い換えれば、清水亮と白岩伸也が、見田宗介が概念化した戦争の体験という「未定の遺産」を援用し、「体験者としての語り」を「既定の遺産」にするのではなく、「未定の遺産」として位置づけることの重要性を説いた¹²ように、絶えず「個人の記憶」に触れ続け、過去の認識する自分自身の歴史認識を攪乱させ続けることである。

以上の内容を踏まえ、本稿が戦争の記憶に触れる機会として着目するのが「エゴ・ドキュメント」である。それは、個人の遺した日記や手紙、証言、回想などの史料を通じて、様々な個人の記憶という「過去」との出会い方の切り口から「過去」を語る試みとなるだろう。

戦争の時代における個人の過去の記憶が集約された史料に出会うこと＝過去との出会いによって、生徒たちは、自身が持つ歴史への認識の枠組みにどのような動揺や攪乱をもたらすのか。そして、それが生徒自身の「歴史実践」の前提としてどのような意味を持つのだろうか。それを必修科目である歴史総合において試みる。

2節 エゴ・ドキュメントの活用について

歴史総合を履修する5年生生徒の歴史的知見はどのように構築されてきたか。特に中心となるのが、「事実を確認する材料」としての資料であり、それを読み取ることによって、歴史的 content における知見を広げてきた。基本的に資料集を利用し、資料集が教科書を補完して内容理解を深化してきた¹³。そのため、今回エゴ・ドキュメントを史料として扱うという明示がなされたことはエゴ・ドキュメントという史料の特質にも触れる機会となったといえる。本稿においてエゴ・ドキュメントを扱う意味とは、「その時代に生きた個人の記憶に触れ、「現代を生きる自分」が何を感じたかを言語化する」ことに目標に置いている。

エゴ・ドキュメントを授業における教材史料として活用していくことについては、歴史研究における個人史料の発掘やその活用の進展が目まぐるしく進んでいることが第一に挙げられる¹⁴。そのような史料を授業実践の場においていかに活用できるかを問題とした時、長谷川貴彦の以下の指摘は重要である。

エゴ・ドキュメントは語り手の視点から外側の世界をみる手段であり、記憶・感情・欲望・知

識・意味などの主観性を考察するという利点をもつ。個人という主体の構築において、背後に複雑な社会的・歴史的過程が存在することを明らかにしてくれるのである¹⁵。

つまり個人の記録＝個人の視点から全体を捉えなおすことで、その時代を生きた人間のありようから「既定」とされた事実を捉えなおすことにある。また、客観的な事実として認識される歴史的事象を一人ひとりの「主観」に焦点を当てることで、特に過去を生きた一人の個人と現代を生きる個人の「結びつき」の機能が発揮される。これに関して富田隆は、エゴ・ドキュメントの一つである日記の意義として以下のように述べる。「情報の価値は発信者が何をどのように伝えるかだけでは決まらない。誰がどのように受信するかによって、その価値は大きく変化する」のであり、「情報の価値は絶対的なものではなく、受信者側の事情により相対的に変化する」のである。つまり、「日記を単なる「外部記憶装置」とのみ見る事」ではなく、「日記を読み解こうとする営みは、単なる過去思考の訓誥学ではな」い。それは、「時空を隔てた「個人」の体験と成果を共有する可能性に道を拓くものであり、未来を志向する創造的な生命活動」である¹⁶。このように情報を受動するだけではない、「いま」からの働きかけを見ることができる。そして、これこそが、今井むつみが「生きた知識」として評価する知的基盤となるだろう。つまり、「知識の断片的な要素がべたべた塗り重ねられて膨張していくものではなく、すでにある自分の経験や知識と関わりながら「常にダイナミックに変動していくシステム」であり、新たに「要素が加わることによって絶え間なく編み直され、変化していく「生き物」のような存在¹⁷」と捉えた「生きた知識」の獲得にもつながるものである。

それは図らずとも、自己の視座を自覚する場面にもあたる。つまり、「確かな記録」としてではなく、その記録にどのような視座で向き合うかという問題であり、多角的視点や批判的思考といった要素も想起できよう（この点は5年生グループ研究を参照）。

3章 単元と授業の設計について

1節 教材の選定と単元の設計

戦争を語るエゴ・ドキュメントは無数にある。そのため教材としてエゴ・ドキュメントを選定する行為と単元設計は、教員自身の「歴史実践」の試みの具体化である。つまり、授業者自身のアジア・太平洋戦争という歴史的な事象に対する問題意識＝個人の体験に根差す「戦場の記憶」を問うこと。そして総力戦における戦場を主題化し、記憶に反映される総力戦の作用を問うこと。これらを共有することになる。

総力戦を中心とした戦時期の社会史が歴史研究において注目されるようになったのは1990年代である。戦後歴史学の主流であった講座派マルクス主義史学の示した天皇制ファシズム論の枠組み¹⁸が、1970年代以降、「革新派論」をはじめとする実証研究¹⁹により相対化されていくなか、1990年代初頭、山之内靖や瀬戸厚によって提唱された。山之内によれば、第二次世界大戦は「非合理で専制的なファシズムの体制」と「合理的で民主的なニューディール型の体制」の「対決として描」くのではなく、「階級社会からシステム社会への移行」という観点から双方に共通する総力戦の意義を見出した²⁰。山之内は、戦争へ国民全員の動員のために階級対立を解消し、国民の「強制的均質化」をはかったこと、革命の主体である労働者を体制内に包摂する妥協をはかり、それにより各種社会保障制度が充実したことなどの戦後期・現代社会への連続性を論じた²¹。これらの議論の出現は戦時期への研究を多面化させたと言える。また黒沢文貴によると、上記のような実証史学の影響を少なからずうけたマルクス主義歴史学の系譜をひく研究者により、日中戦争、アジア・太平洋戦争におけ

る日本軍の加害行為や戦場の実情が実証されてきた²²。それは、「加害」「被害」の二項対立ではなく、戦争の実情そのものを問う契機になった。これらは、直接の戦争経験を有しない世代による営みの成果であり、軍事研究への眼差しが「民衆史・地域史・教育史・社会史、さらには民俗学など」多面的な学問分野からのアプローチが進展したからである²³。

それにより戦場における兵士の実情に関する研究も多彩に進展している²⁴。また戦時期における社会情勢も国民が単に戦争に巻き込まれたのではなく、「戦場につながる場」として銃後の生活が意識され、人々への戦争への動員・参加の実態も明らかにされてきている²⁵。そうした実態への着目を重視し以下の単元を設計した。

単元を貫く問い	「戦場の記憶」は私たちに何を伝えているか
第1次	日中戦争と深刻化する世界の危機 「小林太郎の戦場」
第2次	第二次世界大戦の勃発
第3次	第二次世界大戦における連合国と戦後構想
第4次	① アジア・太平洋戦争と日本の敗戦 「沖縄戦の記憶」 ② 戦場の記憶」を問う 「それぞれの戦場の記憶」

歴史総合の重要概念は「近代化」「大衆化」「国際化」の三つの変化である。とくに第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争はその三つの変化の到達点と言うべき「総力戦」の位相を示す。つまり「国民国家によるシステム統合はすでに私たちの身体を規律化するところ」の成果として戦場の諸相があり、総力戦に伴うナショナリズムの浸透は「私たちの日常的意識を形成し、そこにおける言語的コミュニケーションの内容を規定する」までに至っている²⁶時代である。

とくに「大衆」が「国民」として規律化されていく「近代化」の過程²⁷において、その歪な構造と暴力性が具体的な戦場を舞台として発揮された象徴的事例が沖縄戦である。沖縄という近代日本の拡大と支配の象徴は、アジア・太平洋戦争では「本土防衛」のための「捨て石」「時間稼ぎ」とされた「国民国家」の周縁である²⁸。しかし、その「日本」との格差と落差の中で「日本人になる」という動機をもって戦場に動員されていく兵士や沖縄の人々の存在もある²⁹。まさに国民であることが自明とされた暴力性と大衆化された社会における同質性の脅迫は、「集団自決」が象徴する共同体としての死への動員へと直結する。その要素と「近代化」＝「発展」への憧憬が総力戦を成り立たせている。そうした「近代」という時代の問題と向き合う時間でもある。

そして、以上の「総力戦」や「近代」という時代の問題を想定したうえで、実際の南方戦線に従軍し、「消耗品」としての兵隊を克明に描いた水木しげるの「自叙伝」となる漫画、戦時下を東京で生きた作家であり「あまり誰も言わない」戦時下の生活の問題を指摘した近藤富枝の証言と陸軍の整備下士官として従軍し、戦争に青春を捧げた原田良次の日記を教材とした。水木、原田、近藤ともに戦後社会において自身の経験を論じたが、それぞれの戦争体験は固有の価値がある。佐藤泉が論じるように、私たちは、「過去の事実として戦争を知るとともに、それぞれの場の歴史構造において過去の戦争がどのように「記憶」されてきたか、公約数などどうていありそうもない記憶の層としての「戦後史」を私たちは知る必要がある³⁰」。つまり、この3人の語りはあくまでも「無数のひとりが生きた歴史を紐解き、無数のひとりが日常的に紡いだ歴史に寄り添うこと」の入り口となる。

2節 教材とした史資料

① 沖縄戦における女学生の語り³¹

(1945 年、師範学校の卒業学年だった女性、野戦病院への動員が決まる)

父母に戦場へ動員されることを告げた時の顔が今でも忘れられないさ。父は軍事教練を担当する教員だったからね。私が動員されることを喜んでくれると思っていた。 「国の為に尽くしてこい」と言われると思っていた……。 でも、父は大声で怒鳴った。 「お前を戦争で死なせるために育てたんじゃないんだぞ！」と。 そのそばで母は、「もう卒業証書はいらないから、私たちと一緒に残って」と泣いていた。そんな母に「お母さん、そんなことしたら、みんなに非国民と言われるよ！」と言ったんです。
② 「集団自決」³² (手榴弾を爆発させたが不発も多かった後) 突然、私の目に一つの異様な光景が飛び込んできました。一人の中年の男性が、一本の小木をへし折っているのです。私は、いぶかりながら目を凝らしました。男性はついに小木をへし折りしました。そしてその小木が彼の手に握られるや否や、それは「凶器、へと変わったのです。彼は、自分の愛する妻子を狂ったように殴殺し始めました。この世で目撃したことのない、いや想像したことさえない惨劇が、私の眼前に出現したのです。以心伝心で、私ども住民は、愛する肉親に手を掛けていきました。地獄絵さながらの阿鼻地獄が展開していったのです。 剃刀や鎌で頸動脈や手首を切ったり、紐で首を締めたり、棍棒や石で頭部を叩くなど、戦慄すべきさまざまな方法が取られました。母親に手をかした時、私は悲痛のあまり号泣しました。私たちは「生き残る」ことが恐ろしかったのです。
③ 沖縄出身日本兵の家族への手紙³³ この大東亜戦争に勝った暁には、僕ら沖縄の人間は、日本人と同等に扱われる。だから僕らも戦争に勝ったならば、日本へ行って家族和気あいあいとして生活できる。
④ 近藤富枝の証言³⁴ …あんな時代だからそれは仕方なかったかもしれないけど、うんと若いのに未亡人になって、婚家で義父母の世話をして暮らして……つらいわよね。夫が出征した後に子供が生まれて、子どもの顔を見ないまま夫は戦死、というパターンもずいぶんとあった。戦時中、そして戦後の混乱の中で、一人で子供を育てるのはどんなに大変だったか。あとせっかく生き残った夫が、敗戦の時に自決してしまったという人もいる。私たちはそういう世代なの。結婚できた人はまだいいという考え方もある。とにかく年齢の釣り合う若い男の人がいなかったでしょう。日本中男と言えば老人と病人ばかり。職場に残っていた男性もいなくなかったけど、ほとんどが既婚者だった。 あまり誰も言わないけれど、当時の東京では未婚の若い女性と、既婚男性の不倫が多かったのよ。他の都市部でも多分そうだったと思う。男の人は職場のある東京に残って妻子を地方に疎開させるでしょう。だから一人暮らし。で、独身の女性と恋愛になってしまう。若い女性のほうは、相手を本気で好きになる。愛したい、愛されたい年頃だもの。戦争っていう暗くて不安な時代に都会で働いているのよ。男の人に支えてほしい。優しくされたい、というのは自然な気持ちでしょう。 でも当時は、姦通罪っていうのがあって、不倫は犯罪よ。もし妊娠なんかしてしまったら、墮胎も罪になる。表に出ない悲劇もたくさんあったはずよ…
⑤ 水木しげるの戦場経験³⁵ (実際の漫画の描写も共有した) 軍隊で兵隊と靴下は消耗品といわれ、兵隊は“猫”位にしか考えられていないのです。こと“死”に

関しては、やはり人間である。“一寸の虫にも五分の魂”という言葉があるが、兵隊全体の暗黙の同意なしにただ命令というだけでは、玉砕は成立しないと僕は思う。(中略)

…将校、下士官、馬、兵隊といわれる順位の軍隊で兵隊というのは"人間"ではなく馬以下の生物と思われていたから、ぼくは、玉砕で生き残るとするのは卑怯ではなく"人間"として最後の抵抗ではなかったかと思う。

この物語では最後に全員死ぬことになっているが、ぼくは最後に一人の兵隊が逃げて次の点で守る連隊長に報告することにしようと思った。だが、長くなるので全員玉砕にしたが、となりの地区を守っていた混成三連隊の連隊長は、この玉砕事件についてこういった。

「あの場所をなぜ、そうまでにして守らねばならなかったのか」

それを耳にしたとき「フハッ」と空しい嘆息みたいな言葉が出るだけだった。

あの場所をそうまでにして…なんという空しい言葉だろう、死人に口はない。ぼくは戦記物をかくとわけのかからない怒りがこみ上げてきて仕方がない。多分戦死者の霊がそうさせるのではないかと思う。

⑥ 原田良次(日本陸軍、戦闘機の整備下士官)の日記³⁶

一瞬、いま爆音のとどえた不思議な日本の夏空に気がつく、それはきわみなく蒼く、その灼けるような炎天下の下、目の前で化石のように無感動にただずむ兵士の隊伍の上に、蟬しぐれが降るように注いでいた。隊列で、ただ一人、砲兵隊の老准尉が肩をおとして慟哭した。しかし、このとき夏日の炎熱の空気はそよそよと動こうとしなかった。

日が落ち遠く我が基地を望めば、はるかレーダー陣地からごうごうと数条の火焰が立ち昇り、その先は細い一条の黒い煙に変わっていった。このときあまりにもはなやかなこの狂炎のむなしさと哀しさが胸に強く迫ってきた。機密文書を焼却しているに違いない。信じられないままにこれを見て、「戦いは敗れた」とみずからの心にいいきかせた。このとき初めて熱涙が滂沱としてやまなかった。それは悲しみの涙でも、喜びの涙でもなく、ただひたすらに、永い私の六年の青春を賭けた真摯な人の営みが、おとをたててくずれて行く挫折に思う感動の涙であった。いまや祖国の栄光も、私の青春もふたたび還らない。(中略)

…平和や帰還のよろこびを意識することのないまま、むしろ敗戦の国の前途の苦難と不安を想い、それが実感となって重く重くのしかかってきた。そして兵隊は昨日まで身を空爆の下にさらした戦場の戦慄や辛苦よりも、いま「無条件降伏」の底知れぬ不安と恐怖に耐えかね、暗然たるものがある。

この先、この国に、私の、そして人々の明日の住家はどこにあるというのであろうか。

戦いは多くの人々の血を流して敗れた。

今後このことはいったい歴史の中で何を意味するのであろうか。

問いは、①・②・③の史料から「沖縄戦において人々は、いかに戦場を生き、死んでいったのか。そして、なぜそのような事態になったのか」の考察をしたうえで、④・⑤・⑥の史料の考察に移行し、(1)3つ史料の中で最も印象的であると感じた史料を選び、その理由を論じてみよう。(2)個人の遺した生／死の記録である「エゴ・ドキュメント」は、歴史の実態を考えていくうえでどのような意味があるか。(3)戦時期に生きた人々の「語り」は、近代の到達として「総力戦」のどのような様相を示しているか。「総力戦」「国民国家」「大衆社会」など観点と「戦場」を結び付けて考えてみよう。そして、まとめとして単元を貫く問いである「アジア・太平洋戦争における「戦場の記憶」は私たちに何を伝えているか」を記述した。

4 章 成果と課題

1 節 沖縄戦をめぐる問い

沖縄は、受講生徒たちが 2 年前に修学旅行で訪問し、実際にガマの見学やひめゆりの塔などを訪れ、体験者の話を伺っている。ここで重要なのは、その経験の「再構築」である。2 年前に実際に傾聴した「語り」と実際に場を訪問した記憶が、本単元における「語り」が揺さぶりをかける。これは、戦場の実際に対する違和感と疑問の発露が強調されている（以下生徒の記述の表記は原文通り）。生徒(A)

総力戦⇨同町圧力 以心伝心 沖縄の人々の一体感
米軍にも日本軍にも（スパイとして）追われる日々→心のよりどころがない…？
どうせ生き残っても米/日本軍につかまる→ならば家族を楽に死なせたい…？
に殺してもらいたい…？

生徒(B)

・日本人は沖縄人を日本人として扱っていなかった
→だから本土決戦の戦場として使った？
→死んでしまっても完全な日本人じゃないから良い。しかし、一応日本人なのだから戦え！ と

いったような考え？

生徒(C)

「日本人として勝ったら扱ってもらえる」
「国の為に尽くしてこい」と喜ばれると思っていた」
「そんなことしたら、みんなに非国民と言われるよ！」
→学生や若者が「国のために」という日本への同化に溶け込んでいる？
また、総力戦が当たり前と考えている？
⇒学校教育における総力戦体制への貢献が日本に組み込まれた、日本人として扱われる上で行われていたのではないか。
日本のためにつくすことが当たり前、正義であると教え込まれてきた…？
↑↓
「お前を戦争に死なせるために育てたんじゃないぞ！」
「もう卒業証書はいらないから私たちと一緒に残って」
→親(特に軍事教練する父)が戦争に関わることを反対している(普通は子どもが嫌がって親が説得するのは…？
軍事教練する人ですら動員に反対⇨では父はどのような気持ちで今まで教えてきたのだろうか？
(以下略)

沖縄戦は日本の前線である沖縄に米軍が上陸して行われた日本対米軍の戦争である。これが一般的な戦争の構図における認識であり、その構図の中で様々な悲劇が生じてきたと認識してきた。しかし、上に示した生徒たちの記述はその構図を、まさに攪乱するものである。そして、ここでは史料中の主体そのものの心情を想像することで、可能な限りそれを説明をしようと試みている。しか

し、興味深いのは、上記の記述をした生徒(C)に授業後に記述の感想を聞いた際に、「言語化できなかった。」「簡単に説明してはいけないと感じた」と答えたことである。問いが問いを生み、安直な「説明」を踏みとどまらせているのである。

以上のような記述に対して、自分なりの枠組みを用いて構図を分析する記述も見受けられた。生徒(D)は史料③の手紙に以下の違和感を表明している。

- ・今までは日本人と同様に扱われていなかったのか？
- ・戦争に勝ったら本当に家族和気あいあいとして生活できるのか？

沖縄は、「日本」である。そのように認識していた。しかし、ここでその認識は相対化されていく。この生徒(D)は続けて以下のように分析する。

…自ら自分の肉親を殺したり自殺したりするなど、正常時ではとうてい考えられないようなことが沖縄戦では行われていた。「正常時では考えられない」つまり、彼らを取り巻く状況や精神状態が異常であったことが分かる。沖縄戦がこのように「異常な戦争」に発展してしまった原因として、彼らの精神の根底に「差別」というものがあつたと考えられる。方言札を代表とする壮絶な差別が総力戦の原動力とつながってしまい、このような事態になったのではないか。

→勝つ＝日本人と同様に扱われる＝差別されなくなる

(根拠のない結び付けが彼らの頭の中で行われていたのではないか)

この生徒(D)の記述の特徴はあくまでも沖縄戦の状況を「異常な状態」として整理しつつも、まとめとして「戦場の記憶」は私たちに何を伝えているか」への応答として、

①人は共通の目的や思想があると、正常時では考えられないような行動をとってしまうことがある。例えば、沖縄戦争では「差別からの脱却」という共通の目的が戦争を激化させたと考えられる。(総力戦) →共通の目的や思想は人にとって大きな原動力となる。

と記述した。ここでは「差別」という普遍的な問題を提起したうえで、継続して総力戦を「異常」と位置付けつつも、「共通の目的や思想」は「原動力」とであると善悪の二元論に回収されない記述をしている。ここで「差別」や「共通の目的や思想」という普遍性に注目している点は後述する。

生徒(E)は以下のように分析した。

ナショナリズムにより国民意識が生まれ、それらが人種の優劣や愛国心へとつながっていった。戦争においてはこの“国のために”という考えた方が多くの人の心にあり(教育による)、国民であれば戦うことは当然であるという認識がされるようになった。

沖縄は琉球処分によって日本に組み込まれたため、帝国主義の考えも持っていた日本人からしたら、沖縄は植民地に近い場所であったのではないか。結果それが人種差別を引き起こし、沖縄の人々に劣等感を与えたと考えられる。人種に対して劣等感がある場合、自分より上の人種の人について行かなければ、その先がどうなるかわからない。沖縄の人にとっては、日本兵の支持を無視して生き残ることは、死ぬことよりも「その先どうなるかわからない」という恐怖が強くあつたと考えた。

ここで重要なのは、「植民地」という概念を用いて沖縄がおかれた問題を説明するとともに、「植民地主義」の被支配的精神としての「恐怖」が生み出される構造を自己の言葉で分析していることである。同じ「日本」の中にある「植民地主義」の構図から一人ひとりの「死ぬ」「生き残る」に根ざした「恐怖」に寄り添っている。

以上のように、沖縄戦を主題としたエゴ・ドキュメントの分析は、自分たちが沖縄に行った経験

や、これまでも沖縄戦について学んできた経験を前提にしつつも、ひとり一人の戦争の記憶が、その認識を相対化させうる可能性を持つ。つまり、個人の記憶が、いまを生きる自分の認識枠組みを変容させるのである。

2節 「戦場の記憶」を受容する

続けて、水木しげる、近藤富枝、原田良次の史料の読解をその受容について見てみたい。

水木しげるの戦場経験における「兵隊は馬以下」「靴下と同じ消耗品」と位置付けられた記述に対しての「衝撃」が、「命の重み」という視点で印象に残ったと記す生徒が多い。そして、「現在の命の価値観とは異なる」点に注目し、戦場と「いま」を切り離して思考する記述が大半を占めた。

近藤富枝の語りからは、戦時下を生きた女性の生活が「愛」と「不倫」の文脈で語られたことへの「衝撃」が記述された。未亡人のおかれた状況や「愛されたい」が故に現在においても不道德とされる「不倫」につながる動きに、戦時下と現在における「愛」や「家族」の形を対比しつつも相似形として受け取り、連続させる記述がみられた。

原田良次の日記からは、「敗戦国の未来」への「不安」に注目する記述が中心であった。以下の生徒(F)の記述のように、現在を生きる自分たちの視点では、終戦＝解放の喜びとして捉える前提が相対化された。

辛い戦場のことや人の死を考えると、「戦争が終わる」というと今の時代に生きる私たちは良いことのように捉えてしまうが、この史料を読むと、それ以上に「敗戦国の未来」を不安視していたことが分かって妙に納得したと同時に新しい視点だった

また、原田が「青春」と表現しているように、自身の青年期の長い時間をかけた戦時期の期間を想像し、その「青春」が崩れ去る敗戦に共感する記述が注目される。

歴史の実態を考えていくうえで、エゴ・ドキュメントはどのような意味があるのか。98人のうち92人の生徒が、「感情」「精神」「心情」「メンタル」などの内面的理解が進むことで、より「リアリティ」が増すこと、「自分事のように思えること」「実態が想像しやすくなる」ことを挙げた。こうした記述は想定内であるが、注目すべきは、エゴ・ドキュメントに触れたひとりひとりの記憶に触発されて、自身がかつて聞いた「戦争の記憶」を記述する内容が見えることである。つまり、水木や近藤、原田と似たような経験をした身内の戦争経験の記憶や、これまで自身が訪れた戦争博物館等の語りを想起することである。戦争の経験はひとりひとり異なるものであるが、戦場における同様の経験や、相似した内容を想起することで、「悲惨」「過酷」という語句で語られがちな感想に具体的な文脈が生じていく。これは、他者の戦争の記憶に出会うことによって、語りの主体と問題を共有することで、自己のこれまで持っていた語りの文脈を拡充し深化させるものである。そうした「無数のひとり」の語りをつなぎとめて自己の歴史認識と歴史叙述を果たしていく中で、「戦争」という概念を多角形の具体的な事象として語ることができるのではないか。

3節 「戦場の記憶」における認識の構図とその「歴史実践」への課題

エゴ・ドキュメントを通じた「戦場の記憶」の需要の構図については、井上義和が提起した「①断絶・対照関係」と「②連続・継承関係」に分類できる³⁷。井上が言うように、これらは明確に区分されるものではなく重複することもあるが、この構図に従うと生徒たちの「戦場の記憶」の受容の実際が見えてくる。

「①断絶・対照関係」は水木しげるや原田良次の戦場経験をはじめとした「実際の戦場」に対しての枠組みである。つまり、「いま」を生きる自分たちの日常とは異なる異世界としての「戦場」が

あり、そこに思いを馳せる。戦場に置かれたひとりひとりの経験を想像する前提には、戦場とは対極に置かれた「いま」の自分がおかれた自己認識がある。だからこそ、兵士を「消耗品」と位置付け、「玉砕」に向かう日本軍の実態を容易に非難することができる。

「② 連続・継承関係」では、おもに近藤富枝の経験のような「いま」の日常性に通じる問題が挙げられる。「もし自分だったら」という想定と共に、「家族」など身近な問題もつながっていく。つまり、「いま」を生きる生徒の日常生活につながる文脈において「連続・継承関係」は作用しているのだろう。

この「① 断絶・対照関係」と「② 連続・継承関係」の認識枠組みにおける生徒の「戦場の記憶」の受容の中心にあるのは以下の二つの記述のように極めて明快な問題意識である。

生徒(G)

「戦場の記憶」から得られる当時の人々の生活や気持ち、苦悩は、私たちに戦争の悲惨さと戦争が与える影響を教えてくれる。そして、戦争がただの「歴史的事実」ではなく、当時を生きた多くの人々を巻き込み犠牲にした「犯罪行為」だったことを伝えてくれる。(戦争は国と国との争いという無機質でシンプルなものではなく、人々の命や時間、資源を奪った大変な出来事であったことがわかる)

生徒(H)

戦場の記憶は私たちが戦争について知る機会を与え、未来に向けて過去をふまえて考え続けることの重要性を伝えてくれる。様々な戦場の記憶では、当事者が体験したことや戦場に身を置きながら感じ取れた感情やおもいから戦争の残酷さを知ることができる。また、戦争の記憶では、この戦争の意義に対する疑問がいくつか見受けられる。このような当事者の疑問は私たちに戦争の意味や過去を考え続け、これからを生きる人間としてこのような出来事をどのように受け取っていくべきかを考えさせることにつながる。このことから、戦場の記憶における体験記や問いかけは私たちにこの出来事をふまえて未来の戦争のために私たちがすべきことを考えさせることにつながると考えた。

ここで、改めて問われるべきは、「戦場」という場所である。上述したように、水木が体験した「わかりやすい戦場」と、銃後の経験は断絶している。その断絶は、過ぎ去った過去としての「戦場経験」における体験者の死が、過去の記録として放置されることも否定できない。単に悲惨な「記録」と位置付けるだけではなく、連続性を見出した銃後と「接ぎ木」をし、自己の日常の営みにつながる「歴史実践」へと「戦場の記憶」を「未定の遺産化」する作用が必要になるだろう。

それを紐解く鍵が、沖縄戦を巡る問いにおいて生じた生徒たちの記述である。沖縄戦において「総力戦」の問題の根本を見た生徒(D)は、沖縄戦という総力戦を「差別」や「共通の目的や思想」という普遍性から認識している。つまり、沖縄の兵士も住民も、「戦場」に置かれた一人一人として総力戦を構成しているのであり、そこには前線も銃後もなく、等しく戦場に置かれた人々の記憶と向き合っているのだろう。そのうえで、生徒(C)が「言語化できなかった。」「簡単に説明してはいけな」と感じた」と応答した動揺とためらいと、記述がクエスチョンマークで埋め尽くされた文脈を関連付ける必要がある。こうして、「沖縄戦」を表象する「語り」を通じて生じた新たな「問い」が、「戦場」を認識する接ぎ木となる。

「死んでしまっても完全な日本人じゃないから良い。しかし、一応日本人なのだから戦え！ といったような考え？」という問いからは、自明とされた「国民になる」ことの意味を再考する機会が

与えられる。そして、自明となっている「日本人」や「国民」という枠組みに対して、「戦場」を問題とするからこそ発揮される問いが発せられる。こうした「問い」の存在こそが、これまで自明としてきた自己の認識の攪乱の象徴ではないか。つまり「戦場」における具体的な語りが「いま」を問い直す原動力となる。

以下の生徒 (I) の記述は、以上の課題の道筋を示す内容である。

1879 年の琉球処分や方言札の存在が沖縄の人々に“日本人”であることを強制していく流れを作った上で、沖縄戦が繰り広げられることになった。沖縄の人々は“日本人”よりも下に扱われながらも日本のために地上戦という形で多くの血を流していく。もし自分が当時の沖縄の人々が置かれた状況を体験していたとしたら、日本のために死のうとは到底思えないだろう。それでも当時彼らが戦争の勝利を通し、日本人であるというアイデンティティーを求めている(と資料から読み取れる)のはなぜだろうと疑問に思う。なぜか考えることはできても真に理解することは恐らくできない。戦争という極限状態において、敵である米兵はもちろん、味方である日本兵にすら殺された彼らはいったい何を思ったのだろう。そこにあるのがただの恐怖だったとすれば、死を恐れた彼らは集団自決をしなかったのではと思うし、寧ろ恐怖を通し洗脳されたことで、「捕虜になるなら死んだ方がよい。生き残ってはいけない。」という考え方に至ってしまったのではとも思う。少なくとも、私が前述のように沖縄戦で自決しようとは思えないと感じる理由の一つには今まで受けてきた教育が大きいのだろう。私は沖縄戦の後の歴史を知っていて、捕虜が死よりも辛いとも思わない。「生きるとは尊いことだ。」とずっと言われてきたし、英語が話せる住民のおかげで生き残ったガマがあるといった話を通し生きていくことの素晴らしさを教えられてきた。生きることを尊いとするなんて馬鹿げていると思うわけではないが、戦時の「国のために死ぬのが尊いことだ」とする教育をうけてきたらまた違う考え方が私の根底に生まれたのではないだろうか。こういったことを考えると教育の影響力に恐ろしさを覚えるとともに、自分は何を信じ、何を大切に生きていくべきなのか、「ただ戦争はよくない」という結論に至る前に考えていかなければいけないと思う。

ここでは、沖縄戦の状況における人々のありように思いを馳せるだけでなく、そこから「いま」自身がおかれている価値観を問い直している。そして、「自分は何を信じ、何を大切に生きていくべきなのか、「ただ戦争はよくない」という結論に至る前に考えていかなければいけない」と一度踏みとどめ、「戦場の記憶」を「いま」の自分に接合している。この生徒は、その接合の結果として学校で行われている「教育」の価値そのものを問おうとしている(この生徒(I)に限らず、戦時下の問題として「教育」に着眼した記述の量は注目される。回収した 98 人のうち 42 人が戦時期の「教育」に注目していた)。

これは、学校という場で、教育を通じて価値観を形成してきた自身の日常生活に「戦場の記憶」を持ち込むことで、「教育」の持つ作用に意義を見出しつつ、寧ろ自分自身も当事者として、その問題に向き合おうとしている。これは、まさに富山一郎が鋭く指摘した「戦場の記憶」を問う意義である。

戦場が異常事態でもなければ、日々の生活から切り離された狂気でもなく、毎日の陳腐な営みはおいてこそ準備されるのだとしたら、過去の戦場の記憶をいかは語ることができるのだろうかということこそ、問われなければならないのだ。また同時にそれは、一見戦場とは無縁にみえる陳腐な日常に、戦場の記憶をもちこむことでもあるだろう。戦場に日常をもちこむことにより、日

常と切り離されたところで戦場の記憶を語る語り口を問いただし、今度は逆に日常のなかに戦場を発見するという往復運動が必要なのだ³⁸。

5章 おわりに 今後の展望

「戦場の記憶」に触れる学びは、生徒たちの歴史学習において、異世界としての「過去」を具現化すると共に、心情が描写された記述を通じて、「いま」とは異なる他者との「意味の共有」としての「対話」を行う³⁹ことになるだろう。同時に、それは「戦場」という問題の共有がなされる機会として、自らの歴史認識に対して「動揺」や「攪乱」となりうる。そしてここで生じた「問い」は自身の認識を相対化し、新たな探究の原動力となる。重要なことは、生じた「問い」について性急な解決を模索しないことである。生じた「問い」を共有し、また、他者が立てた「問い」とも出会う。それが新たな視座の形成につながっていく⁴⁰。

それでは、この過去との出会いをいかに「歴史実践」として具体化していくか。ここで重要となるのが、「日常的実践」に代表される「日常」への視座である。日々、生活を送る中、その個人生活のすべては歴史的状況に置かれている。言い換えれば、生徒個人が日常生活において生じる感情を歴史的問題として捉えなおすということである。

特に本稿では「総力戦」における個人の記憶をたどってきた。「総力戦」が近代社会における一つの到達であり、総力戦を経験した社会を現在私たちが生きているならば、それまで見てきた「戦場の記憶」を過去の一場面として切り捨てることは適切ではない。むしろ現代社会の中で内在する諸問題を歴史的な問題＝同時代史として個人を歴史的位相において問う視座が要請されよう。つまり、小川が整理した「歴史実践」におけるD【歴史叙述】E【歴史対話】F【歴史創造】の営みの実践⁴¹であり、F【歴史創造】における「歴史的主体としての自己」のありようを試みることである。本単元が終了し、次単元では「同時代史」を生徒自身が「歴史実践」する。そこでは、自身の興味関心を前提にしつつ、「個人的な問題は、社会的な問題である⁴²」ということ。そして、「無数のひとりが生きた歴史を紐解き、無数のひとりが日常的に紡いだ歴史に寄り添うこと」を課題とし、「現在と過去の絶え間ない対話」の中で、生徒自身が歴史を紡ぐことを目標とする。その試みと成果については、今後の研究課題としたい。

(注)

¹ 1927年11月生まれ。本稿執筆時には存命である。

² 1926年1月～2005年7月 祖父の戦争体験は主に祖母や母を介して聞いた。

³ 田中祐介「「日記文化」を掘り下げ、歴史を照射する」(田中祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史 日記文化から近現代日本を照射する』(文学通信、2022年)) 39頁

⁴ 保刈実『ラディカルオーラルヒストリー ―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』(お茶の水書房、2004年) 20頁～22頁

⁵ 小川幸司『歴史総合を学ぶ③ 世界史とは何か ―「歴史実践」のために』(岩波書店、2023年) 60頁～61頁

⁶ 小川、同上、61頁～62頁、82頁

⁷ 保刈、前掲 50頁

- ⁸ 戦争記憶の継承という観点では松尾精文、佐藤泉、平田雅博編『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』（社会評論社、2011年）蘭信三、小倉康嗣、今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか ポスト体験時代の歴史実践』（みずき書林、2021年）に収められた一連の「歴史実践」が重要である。
- ⁹ 成田龍一『増補 「戦争経験」の戦後史 語られた体験/証言/記憶』（岩波書店、2020年）293～295頁
- ¹⁰ 成田、同上、294頁
- ¹¹ 成田龍一「証言」の時代の歴史学」（富山一郎編『記憶が語りはじめる』（東京大学出版会、2006年）31頁
- ¹² 清水亮・白岩伸也「環礁の屑拾い 「未定の遺産」化の可能性」（清水亮、白岩伸也、角田燎編『戦争のかげらを集めて 遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践』（図書出版みぎわ、2024年）257頁～259頁
- ¹³ 共通の資料集として前期課程では『つながる歴史 東京都版』（浜島書店、2018年）を使用した。もちろん、資料集を含め教材してエゴ・ドキュメントを扱ってきた過程はあるだろう。しかし、そこで「個人の遺した史料」や「一個人」の視点から歴史を見るという学びは初めてになるという。
- ¹⁴ 特に日本史研究においては著しい発展を見せている。近年では古代・中世史における古記録の研究をはじめ、近現代史における日記研究も盛んである。例として臨戦書店より倉本一宏編『日記で読む日本史』が全20巻刊行中であり、吉川弘文館から『日記に読む近代日本』全5巻が刊行されている。
- ¹⁵ 長谷川貴彦「エゴ・ドキュメント研究の射程」（長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店、2020年）8頁
- ¹⁶ 富田隆「倒木の声を聴くー認知行動心理学からみた日記を読み解くことの意義」（倉本一宏編『日記で読む日本史1 日本人にとって日記とは何か』（臨川書店、2016年）268頁～269頁
- ¹⁷ 今井むつみ『学びとは何かー〈探究人〉になるために』（岩波書店、2016年）148頁～149頁
- ¹⁸ 代表的著作として遠山茂樹・今井清一・藤原彰『昭和史』（岩波書店、1955年、新版1959年）
- ¹⁹ 天皇制ファシズム論を相対化した研究として伊藤隆『昭和初期政治史研究』（東京大学出版会、1969年）、同『日本の歴史30 十五年戦争』（小学館、1976年）、伊藤の革新派論に対する批判枠組みの提示として雨宮昭一『戦時戦後体制論』（岩波書店、1997年）など。
- ²⁰ 山之内靖「方法的序論ー総力戦とシステム統合ー」（山之内靖・ヴィクター・コシュマン・成田龍一編『総力戦と国民化』（柏書房、1995年）9頁～12頁
- ²¹ 山之内、前掲、10頁～40頁。
- ²² 黒沢文貴『歴史に向き合う 未来につなぐ近現代の歴史』（東京大学出版会、2020年）33頁
- ²³ 倉沢愛子・杉原達・成田龍一・テッサ・モーリス＝スズキ・油井大三郎・吉田裕編『岩波講座 アジア・太平洋戦争5 戦場の諸相』（岩波書店、2006年）ix頁
- ²⁴ 例えば、代表的な著作は吉田裕『日本の軍隊ー兵士たちの近代史』（岩波書店、2002年）、同『日本軍兵士ーアジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、2017年）、山田朗『兵士たちの戦場 体験と記憶の歴史化』（岩波書店、2015年）、一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』（講談社、2009年）など
- ²⁵ 大串潤児『「銃後」の民衆経験 地域における翼賛運動』（岩波書店、2016年）など
- ²⁶ 山之内、前掲、7頁

- ²⁷ 「大衆」が「国民」として動員されていく過程はジョージ・L・モッセ（佐藤卓己、佐藤八寿子訳）『大衆の国民化 ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』（ちくま学芸文庫、2021 年）を参考にした。「国民」を前提にした「大衆化」ではなく、「大衆」が「国民」に組織されていく点は重要。
- ²⁸ 沖縄戦については屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす 記憶をいかに継承するか』（世織書房、2009 年）第 3 章、林博史『沖縄戦 強制された「集団自決」』（吉川弘文館、2009 年）を参照した。
- ²⁹ 富山一郎『増補版 戦場の記憶』（日本経済評論社、2006 年）、52 頁～55 頁
- ³⁰ 佐藤泉「戦争記憶を記憶する」（松尾精文・佐藤泉・平田雅博編『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』（社会評論社、2011 年）9 頁
- ³¹ 吉川麻衣子「沖縄県の戦争体験者のいま 戦争体験の捉え方の変化に注目して」（松尾精文他編『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』（社会評論社、2011 年）71 頁
- ³² 金城重明『「集団自決」を心に刻んで』（高文研、一九九五年）53 頁～54 頁
- ³³ 金城実「土着の文化は解放の武器たりうるか」全国開放教育研究会『にんげん』（明治図書出版、1975 年）116 頁～117 頁に引用されている沖縄出身の日本兵が戦地のブルーゲンビルから息子の誕生日に送った手紙。
- ³⁴ 梯久美子『昭和二十年夏、女たちの戦争』（角川書店、2012 年）41 頁～42 頁
- ³⁵ 水木しげる『総員玉砕せよ！』（講談社文庫、1995 年）356 頁～357 頁
- ³⁶ 原田良次『東京大空襲』（ちくま学芸文庫、2020 年）325 頁～326 頁
- ³⁷ 井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』（創元社、2019 年）165 頁 なお、井上は分類の中で、戦争の記憶と「自己啓発」の文脈で、特攻隊への感謝などを「連続・継承関係」に分類しているが、本稿では、認識の前提として戦争の記憶をどのように位置づけているかという点で分類した。
- ³⁸ 富山、前掲『増補版 戦場の記憶』、47 頁
- ³⁹ 「意味の共有」としての「対話」についてはデヴィッド・ボーム（金井真弓訳）『ダイアローグ 対立から共生へ 議論から対話へ』（英治出版、2007 年）第 2 章。ボームは「対話」の本質として、問題の解決を図る discussion や communication ではなく、問題そのものを「意味の共有」をする dialogue に「対話」の本質を見出している。
- ⁴⁰ 今野日出晴『歴史学と歴史教育の構図』（東京大学出版会、2008 年）238～239 頁
- ⁴¹ 小川、前掲 61 頁、62 頁
- ⁴² この問題関心として田村あずみ『不安の時代の抵抗論 災厄後の社会を生きる想像力』（花伝社、2020 年）から大きな示唆を得た。

主要参考文献

- 田中祐介編『無数のひとりが紡ぐ歴史 日記文化から近現代日本を照射する』（文学通信、2022 年）
- 保刈実『ラディカルオーラルヒストリー ―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』（お茶の水書房、2004 年）
- 小川幸司『歴史総合を学ぶ③ 世界史とは何か ―「歴史実践」のために』（岩波書店、2023 年）
- 松尾精文、佐藤泉、平田雅博編『戦争記憶の継承 語りなおす現場から』（社会評論社、2011 年）

- 蘭信三、小倉康嗣、今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか ポスト体験時代の歴史実践』（みづき書林、2021 年）
- 成田龍一『増補 「戦争経験」の戦後史 語られた体験/証言/記憶』（岩波書店、2020 年）
- 富山一郎『増補版 戦場の記憶』（日本経済評論社、2006 年）
- 富山一郎編『記憶が語りはじめる』（東京大学出版会、2006 年）
- 清水亮、白岩伸也、角田燎編『戦争のかけらを集めて 遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践』（図書出版みぎわ、2024 年）
- 角田将士『学校で戦争を教えるということ 社会科教育は何をなすべきか』（学事出版、2023 年）
- 長谷川貴彦編『エゴ・ドキュメントの歴史学』（岩波書店、2020 年）
- 倉本一宏編『日記で読む日本史 1 日本人にとって日記とは何か』（臨川書店、2016 年）
- 山之内靖・ヴィクター・コシュマン・成田龍一編『総力戦と国民化』（柏書房、1995 年）
- 黒沢文貴『歴史に向き合う 未来につなぐ近現代の歴史』（東京大学出版会、2020 年）
- 倉沢愛子・杉原達・成田龍一・テッサ・モリス＝スズキ・油井大三郎・吉田裕編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 5 戦場の諸相』（岩波書店、2006 年）
- 吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、2017 年）
- 山田朗『兵士たちの戦場 体験と記憶の歴史化』（岩波書店、2015 年）
- 一ノ瀬俊也『皇軍兵士の日常生活』（講談社、2009 年）
- 大串潤児『「銃後」の民衆経験 地域における翼賛運動』（岩波書店、2016 年）
- 井上義和『未来の戦死に向き合うためのノート』（創元社、2019 年）
- デヴィッド・ボーム（金井真弓訳）『ダイアログ 対立から共生へ 議論から対話へ』（英治出版、2007 年）
- 今野日出晴『歴史学と歴史教育の構図』（東京大学出版会、2008 年）
- 屋嘉比収『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす 記憶をいかに継承するか』（世織書房、2009 年）
- 林博史『沖縄戦 強制された「集団自決」』（吉川弘文館、2009 年）

Questioning "Battlefield Memories" Now

— Toward “Doing History” in an Era in which Memory Becomes History —

Abstract

Each student is required “Doing history” to narrate his or her own view of history. In this paper, we will unravel the history lived by countless individuals from the ego-documents left by individuals, and lean on the history spun on a daily basis by countless individuals. We will then interrogate this within the larger narrative of the history of war that we learn in school, and place the individual's perspective within the history. We will also verbalize as much as possible the turmoil and disturbance caused by exposure to the narratives of past memories in order to reconsider our current way of thinking about history.